

大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会
教養教育・共通教育検討分科会(第11回)

日本の展望委員会

知の創造分科会(第9回)議事要旨

- 1 日 時 平成21年9月1日(火)10:00~12:00
- 2 会 場 日本学術会議 5階 5-A(1)会議室
- 3 出席者 藤田委員長、小林(傳)副委員長、増淵幹事、荻部委員、河合委員
小林(信)委員、三田委員、塩川委員、鈴木委員、松本委員

(大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会)
北原委員長

事務局 廣田参事官

4 議 事

- (1) 「日本の展望」の原稿案について
・ 廣田参事官より資料1について説明があった。

藤田) 日本の展望委員会提言「日本の展望—学術からの提言2010」について、起草委員会で今日から検討作業に入ることだったので、資料1のバージョンを暫定版として提出した。①の部分はこの分科会でまとめたもの、②の方は大学と人材分科会の方でまとめたものを、基本的にはそのまま貼り付けたものである。今回の再提出に際しては増淵先生に意見を頂き、少し追加調整した。原案自体も、この分科会で議論したことを踏まえて前に増淵先生が書いたものを私の方でリライトし、さらに増淵先生に手を入れてもらった。

この「(5) 知の再生産・創造の基盤形成」という項の所定の割当は2ページしかない。最終的には3ページくらいになるのかもしれないが、既に4ページ強になっているので量をほぼ半分にしなければいけない。これから起草委員会で検討するので、今日は大筋を確認してもらい、内容的に変えるべき事があれば伝える必要がある。そのため、今日は必ずしも細かな表現にこだわらなくてもいいと思う。

もう一つ、これの元のバージョンは、8月15日に開催された日本の展望

委員会で検討するために急いで作成したものであるが、それに対して起草委員会の方から、「地球社会と日本社会を両にらみにしたような記述にしてほしい」という注文がきた。その注文を踏まえて、増渕先生に多少書き加えてもらった。

それを昨晚私の方でもう一度見直し、地球社会と日本社会を両にらみにする、という部分で地球社会の部分が弱いと思い、その点についての補足をした。しかし、よく考えるとむしろ逆で、日本社会の方が十分でないのかもしれない、ということを使った。このようなことをメールに書いて廣渡先生に送った。今朝返事が来たが、内容については特に言及はなく、「分量がオーバーしているので、とりあえず起草委員会で検討するが、短くする作業をしてほしい」ということだった。日本の展望本体の方は全体を通して廣渡先生が調整しているので、こちらで調整するよりも全体の流れの中で調整する方がいいだろう、と思った。また、廣渡先生からも「とりあえず全体の文脈を含めて調整し、何か相談することがあればメールをする」という返事があった。

いずれにしても、日本の展望の本体部分に入れる内容として、基本的なトーンや趣旨はこれでいいかどうかを検討してもらいたい。これは当然、「日本の展望」の「知の創造分科会」としての20数ページの分科会報告書をまとめる際の基本的なフレームワークになっていく。もちろん変えてもかまわないが、本体に書いてあることと違うとよくないと思われるので、そういう点で、今日この内容を検討してもらえればと思う。

②の方は本来、「大学と人材分科会」の笠木先生の方にコメントを送って、調整してもらうべきことだが、小生が両方の取りまとめを担当することになっていたので、増渕先生に加筆・調整してもらった。冒頭の「経済のグローバル化に伴い、アメリカ発の金融危機が…」という文言を含む6行くらいのパラグラフとその他の赤字箇所は、増渕先生に追加してもらった部分である。何カ所か少し気になった部分がある。4ページの第2パラグラフに、「ディシプリンの深化と共に、学際的・統合的・俯瞰的な学術大系の構築のために『知の統合』を進めることを主張するものである。そこでは、『あるもの』や『存在』を探究する認識科学と、『あるべきもの』や『当為』を探究する設計科学、『できる』や『対応能力』(competency or ability)を探究する行動科学の間の」というセンテンスを追加してもらった。その箇所で一つ気になるのは、「行動科学」を追加すべきか否かということと、追加する場合、「行動科学」とする方がいいのか、「実践科学」とする方がいいのか、ということである。「行動科学」は“behavioral science”という学会もあり、ある一定のものを指してしまう可能性もあるので、「実践科学」の方がよいように思う。笠木先生のところでも②に追加した内容は検討してもらっているので、あまりここでこだわる必要はないと思うが、それでも、笠木

先生の方で「これでいい」ということになると、「行動科学」という言葉については補足しておく必要がある。

また、鈴木先生からもペーパーを出してもらった。この中に部分的に盛り込んだつもりであるが、テーマ別分科会の報告書をまとめる際に、前に苅部先生から出してもらったものも含めて、盛り込むようにしたい。その際、報告書の構成、記載項目が固まったところで、分担執筆をお願いする、というような方法をとる方がいいのではないか、と思い始めている。そういったことも今日後半で話し合えれば、と思う。

- 短くしろとのことだが、①の最後の三つの視点の三番目について。「知の公共性を前提とし」とあるが、前提としての知の公共性が可能になるために、「言語の公共的使用の能力を高めること」という文言をこの中に滑り込ませていくことはできないか。

藤田) この部分は先生が言語の公共性について講演された時に議論になったことを踏まえて書いたものである。検討したいと思う。

- 同じ三つの視点の2番目について。1行目の終わりに「親を含む」とあるが、これだけ浮いているように思う。

藤田) 確かにそういう印象はある。

- これだけが非常に具体的で、非常にメッセージ性を込めているように受け取られてしまう可能性がある。
- 確かに「多様な他者」といっているので、あえて明記せずともそこに親は自ずから入ると思う。
- もし入れるなら「家族」だろう。
- 家族形態もこれだけ多様化している中で、「親も含む」と書くのはきついのではないか。

藤田) これは削除させてもらおうと思う。社会学的に他者といえ、親兄弟も入ることである。

- 先ほどの指摘と同じところだが、専門領域が融合して統合するということに加え、「協働する」ということが大事ではないかと思う。

藤田) 確かにそうだと思うので、補筆したい。もう一つ、教養の概念・内容についてどのように書き込むかについて、多様な素養を要素主義的に列挙する、ということとはしない、というふうに書いている。しかし、一般には、例示的に挙げられている方がわかりやすい。そう考えると、前から問題になっているが、参加し協働する力、という類のものをいくつか入れる方がいいようにも思う。この「報告書を参照」ということで済ませてしまうのでは、一般読者にはわかりにくいし、この提言自体が「一体何を言おうとしているのだろう」ということになりかねない。

- 3 ページの下の部分で「日本の計画」について触れている。「日本の展望」は、前回あった「日本の計画」のバージョンアップというか、違う側面を補強しようということである。「日本の計画」で何を議論してきたことは、地球環境が限界に近づいていること、また日本は特に閉塞状況にあり、革新的に変化を遂げなければだめだ、ということである。それに対して吉田先生は設計科学の重要性を特に強調された。「日本の計画」と「日本の展望」のつながりがどうあるのか、ということについて、他のところでも出すのだろうが、教養教育のところでも触れた方がいいと思う。地球社会も人口が増加し、本当にぎりぎりの状態まできているということ等をにらみながら、我々教養教育も答えなければならない、という意味合いを含むべきではないか。
- 4 ページについて。「設計科学」は英語で何というのか。プログラムかデザインか。
- プログラムだと思う。
- もしそうすると、プログラム科学はいわゆる当為ではなかったのか。
- だいぶもめた。吉田先生の考えがだいぶ出ていた。
- それをそのまま踏襲していいのか。
- 概念規定をはっきりさせておいた方がいいと思う。
- この表現では価値そのものが何を作るべきかを考えるということで、少しニュアンスが違う。この使い方には違和感がある。
- 行動科学は人間を対象にした認知科学を意味する。

藤田) この部分は大学と人材分科会の方で議論したものを笠木先生が書いたものである。したがって、訂正や修正は笠木先生に進言して検討してもらうことにする。設計科学までは入っていたため、こちらで追加したのは行動科学の部分である。設計科学については確かに吉田先生が価値的な倫理面や実践面も含むものとして言われていたという記憶がある。教育学や社会学では、エデュケーション・プランニング、ソーシャル・プランニングは早くから言われてきた。その場合、プランニングは価値的なものも含めて科学的にきちんと検討し構想する、デザインする、という意味で使われてきたと思う。

○ 一度整理しておいた方がいいと思う。

藤田) そのところは大学と人材分科会に対して、「こういう意見もあった」ということを伝える。

次の行動科学はこちらで追加したものである。この部分はどうか。吉田先生の設計科学の概念は、ここで行動科学と言っていることも含んでいたように思うが、一般的には、二つ並べられると、三つ目を入れたくなるのもわかる。デザインするだけでは十分ではない。

○ おそらく吉田先生はここで言っているものを含んだものを考えたのだと思う。

○ そのこの整理をしておかないといけない。

藤田) ただ、吉田先生がどういうふうに定義されていたとしても、設計という用語は一般的には実際の人々の日常的な活動や行動を含むわけではない。人々が特定のシステムやデザインのもとにどのように動くかということが問題になると思う。

○ その通りである。言っていることは、現実がどうなっているかを見て、何をやらなければいけないか考える、どうやってやるかを考える、ということである。

○ そういう意味で言うと、昔の議論を切り離して書いた方がわかりやすい。

藤田) 設計科学という用語は、かなり日常的にも使われている。我々の周りで、教育計画や社会計画をやっている人達もそんな感じがする。

○ ちょっとニュアンスが違うのではと思う。

- 設計といったときには、20 世紀型というか、社会主義的なプランニングではなく、もっと総括的な、作ったものを実践の過程の中で書き換えていくようなサイクルそのものというか、経営の世界で言う P D C A サイクルのようなものを、計画に対して設計というのだ、ということが、おそらく吉田先生が言っていたことのような気がする。それを受けて、おそらく実践知的なもので、各地の総合政策学部等でやっているような、実践の活動というのがある。設計という言葉には、二つの意味が込められていて、方法のところを勉強する人達も設計や存在の部分をきちんと学んだ上でやろう、という話になっている。切り離すのだとすれば、実践科学という言葉が適切かどうかはわからないが、実践の手法についてやっているところを小さく取り出して、その三つは有機的に連関している、ということを入れる方がいいのではないかな。
- 存在と当為、という伝統的な哲学の二項対立で済まず時代ではないと思った。そして、人材育成が大きなテーマとしてあるので、それをより実践的なものへ、ということで、「実践科学」ということも最初考えた。しかし、何となく、activity の方の内容を前面に押し出した方がいいのではないかな、これからもっと活動的に一歩前に出すというイメージが出ないかな、と考えた。行動科学の概念を用語辞典で調べてみると、少しずれるところがあったが、実践科学よりは一歩前に出るという意味合いを考えたので、つい「行動」という言葉にしてしまった。最初は「実践」と書いたが、後で直してしまったのである。なので、先生方のご意見で設計科学との問題とどこかで関わってくる、ということになれば、それはそれでいいと思う。とにかく、もう少し activity を出したい、と思った。
- 基本的には学際的・総合的・一般的なものを作る、ということのための議論である。おそらくアクションリサーチのようなことだと思うが、そういうことを考えると、それだけでは逆に狭くなってしまう。
- むしろ近代的な用語を使えば用語が独り立ちして、設計科学・行動科学で既にディシプリンができはじめていたら、そういうことによって意味は限定され、かえって困る。古典の言葉に持ってくればそういうことが避けられるかもしれない。
- 中途半端に科学という言葉が付くよりも、そちらの方がいいかもしれない。
- 3 ページについて。「科学と価値観をつなぐ教養」と書いてある。今まで

の科学は価値を抜きにしてやってきたわけで、価値をもっと研究しなければいけない。

- 制度も広い意味で「もの」である。ただし背後に立場があるが、それを表に言うことができないという問題はある。
- そういうふうに言った方が、はるかにわかりやすいと思う。

藤田) 基本的な趣旨は通じたと思うが、この文章の中で説明するのは大変難しい。

- 「認識」、「制作」、「実践」である。
- 古典の現代的レリバンスである。この文章の作成責任は笠木先生だと思う。意見として、こういう指摘の仕方もあるがどうか、ということをつけるのがいいと思う。

藤田) そのようにする。

今、②が話題になっているが、①や前文についてはどうか。日本の社会的システムと人類社会を両にらみするような。

- それはつまり、人類社会の課題解決に資するような教養というものが、例えばこれまでのドメスティックな視点で行われてきたようなものと対立する、という前提で言っていることなのか。それとも両者はいまやある程度接続しているものなので、国内においてもこれはこういう形で理解できる、という形で接続するということなのか、ということがよく飲み込めていない。
- 廣渡先生が言っていたことは、自然科学の方がずっとグローバル化が早かった。一方、人文・社会科学系は、やはりドメスティックに研究してきた部分が多かった。したがって、自然科学に負けずにグローバル化するのだ、ということが彼の頭の中にある。そういうことなので、決着がついていない状況の課題である、というのが廣渡先生の認識である。

藤田) そういう点で言うと、ここに書いてあることはわりとそれを取り込んだ書き方になっている。最初そういう趣旨だろう、と思って書いたつもりだった。しかし、先程の「両にらみ」という注文があって、てっきりその点が弱いのだろうと思った。おそらく増淵先生もそう解釈されて追加されて、私もそれでいいだろうと思った。しかし、夕方に見直してみたら、人類社会の課題は書いてあるが、特にリーマンショック以降の問題等、日本社会が直面してい

る問題・課題には具体的に言及していない。起草委員会には経済学系の委員もいるので、日本社会が直面しているローカルな問題や課題、例えば最近の若年失業の問題や多文化共生といった課題、以前から言われてきた若者や大学生の教養の低下といった問題などを1～2行で書け、ということなのかもしれない、と思った。

- 非常にわかりやすくなった。最初要求がきたときに、個別国家の問題を「グローバル」という言葉で統一しようとしている側面があるのではないかと、思った。次に思ったのは、科学技術ではグローバル化は当たり前である。しかしそれは今必ず限界にくる、と言われている。先ほどの話にあったように自然科学を作り出すときに、科学の分野で要求されるのはイマジネーションになってきている。イマジネーションの場合は、分野の知的な側面だけではなくて、感性等の主観的な要因に依存せざるを得ない時代になるだろうと思う。それはいわばヒューマニティーズがまさに支えるべきことで、科学技術のグローバル化がやがてある限界に直面したときに、もう一度人文社会にその基盤を求める時代が来ると私は思う。したがって、塩川先生の言葉で以前に書かれていたもので言えば、英語が世界共通語だと言われる場合に、それはあくまでも商業や経営やコミュニケーション手段としての言語である。今はそれが重視されているが、結果的にはローカリズムのところを無視して、そのことは言えなくなったのだろうと思う。そうすると、塩川先生が話していた「母語」と「父語」の教育というのは、非常に重要視されるようにならざるを得ないのではないかと。したがって、人文学部が排除されていっている問題は、むしろグローバリズムを進めている科学技術の首を絞めることになるだろう、と考えている。自然科学系が進歩していくのに対して、人文系もそれに追いつこう、というような議論でやることは、学術的には非常に問題があると思う。
- 自然科学の方の人達からは人文科学が必要だという意識が高まっていると思う。それに対して人文学がちゃんと応えるスタンスを示していないのではないかと、という問題がある。「なぜ英語で論文を書かなければいけないのか」「業績に値段がついているのはいかなものか」ということを言う人もいるが、全体としてみて人文系の人達は自分のやっていることを、このままずっと自分たちだけがやっていけばいいとは思えない。人文系も社会学系も、「自分たちのことはいいから放っておいてほしい」と、こもっているような感じがある。そこをもう少し開いていくことの方が大事なのではないかと、思う。
- 先程の三つの中で言えば、グローバルにどこでも観察できる知をもとにド

メスティックな課題の認識能力、課題解決能力というものが必要とされている。おそらくグローバルスタンダード等は若干入っていると思う。国内での課題を挙げて、それをどういった資料を、ということよりも、理想の解決の在り方として教養なるものが共通の基盤の上に乗っていると同時に、抜きがたく存在している個別の目の前の課題に対しても答えうるものである、ということ役割としてきちんと明確にする、ということだと思う。つまり、グローバル化や科学技術云々といったこと自体は問題なのではなくて、それを何に使っていくか、ということを行くくらい入れる。グローバルな課題解決にはもちろん使うが、ドメスティックな課題解決にも実際には使える。また、ドメスティックな問題を解決した手法を、今度はグローバルに解決する手段に変換しておくこともできる。そういう、グローバルなものとローカルなもの、個別的なものと普遍的なものとの間を往復する能力のようなものをイメージしているのではないか。

- 意見をどこまで入れるか、ということ、メールでもらった資料から考えた。だが、鈴木先生が発表されたときの、「こういう先生がいるのだ」というイメージが強かったので、頂いた資料からイメージが全くわかなかった。しかし、できるだけ入れたつもりである。

藤田) ②のところに入れていただいている。これを①に持って来れないかと思っている。「両にらみ」という注文は全体に対してではなくて、①に対してのものなので。

- 教育にできることというのはたかが知れていて、学生に火をつけることくらいしかできない。それは結局、志のようなものを与える、といったことを誰かが言わなければいけないので、これはかなり気恥ずかしいが、学術会議の仕事である。国内に大事な問題がたくさんあるが、なんだかんだ言っても地球全体で見ると大したことではない。そして科学技術の力も非常に持っている。だから世界の中でどういう役割を果たすかという感覚は身につけた方がいい。そういうメッセージは必要だと思う。それがたぶんローカルを踏まえてグローバルに、というときにコアになるのは、何のために、自分の能力をどうやって活かすか、という視点のようなものは常に持つべき、という記述が必要なのではないか。

藤田) 今の点について、今あるものを前提にして、何とか数行で入れる文章を考えてもらいたい。

- ①の前の前文の真ん中では、最初にグローバルな課題が色々書いてあっ

て、ちょうど真ん中のあたりで「もう一方で世界各国は…課題に直面している」という文がある。ここを世界各国ではなく日本の話にすれば、「両にらみ」になるような気がする。日本が抱えている問題も、究極的には色々な国が共通に持っている問題である、ともう一度確認した上で話を進めていく、という形にすれば、「両にらみ」状態をどういうふう考えるか、という問題は残るが、おさめ方にはなと思う。

- 日本を世界標準に合わせる、ということが必要かもしれない。ローカルな知を送り出す、というような。
- ローカルな知ということだけを取り上げてしまうと、それがグローバルな分野とどうつながっていくか、ということがおそらく意識されないのではないか。近年、特に若い人の間で「文化的ナショナリズム」の感覚が広がっている。簡単に言うと、世界中の人が日本のアニメを見ていてうれしい、という話である。これは結局、自分の話が通じない他者に向けて自分たちの文化の良さを発信していくのではなくて、受け入れてくれている人達のことばかりを見ようとしているということだ。おそらくここで「知」とされているのは、そういうタイプの、日本にもいいところがあるではないか、という話ではなくて、日本にあるものを、他の文化・社会の中に生きる人にも通じるように、ロジカルに言い直すにはどうしたらいいのか、そういう交渉能力のことだと思う。個別の課題で、それを作ったり活かしたりしてきた知恵というものを、いたずらに肯定するのではなくて、きちんとグローバルな知に接続していく形でコミュニケーションできるような能力が必要なのではないかと思う。

藤田) 世界各国、日本社会を含めて、ニュアンスとしてそれがわかるような表現で書く。それに対応して①の教養のところに、グローバルな知とローカルな知をつなげよう、というような点を含めて2～3行で書き込めればよいと思う。

- グローバルとローカル、と対峙されるが、ナショナルに対してのローカルもある。つまり、グローバルといったときに、世界で非常に問題になっているコミュニケーション、言語であれば単一言語、通貨であれば単一通貨といったものを、例えば先程の話にあったように、日本の文化を他者にわかる言葉で伝えなければいけない、というときには、違うものを違うものとして相手に伝達する、つまり違うシステムや違う組織とのインターフェースを作る、ということである。ただし、インターフェースが作られることによってコミュニケーションがなったとしても、両方の集団であれシステムであれ、

それぞれに独自性が保たれる状態、というのがローカルである。それに対してグローバルというのは、度量衡の統一というのが典型だと思う。実は人間の生活や生活環境というのは絶対グローバル化できない。つまり、科学技術や技術はグローバルな側面で、有効に働かなければならず、その果実を享受するあるいは被害を受ける人間・集団が、結局ある下位集団の独自性を解体する、ということとはできないはずである。その部分のグローバルなことが問題になっていることを挙げた上で、日本の問題ということを得た上で我々の立場を考えるのではないか。

藤田) 二つ論点があったと思う。一つは日本社会について、もう少し明確に書き込むということ。もう一つはローカルとグローバルの用語、概念について。グローカリゼーションという合成語もしばしば使われるようになっているが、その場合のローカルはナショナル以下はすべて含んでいる。ナショナルもグローバルに比べればローカルである。もう一方で、日本の展望の他の分科会のレポート、特に人文社会科学系の分野別委員会のレポートの中では、グローバル・リージョナル・ナショナルという区分けがわりと使われている。これは政治経済を専攻している人達の間では、いわゆる EU のようなものがリージョナルで、それに対してナショナルがある。もう一方でグローバルに対するローカルは、文化的な側面も含むので、ナショナルなものも、グローバルなものから見れば、各地域が持っているローカルなカルチャーや言語であり、ナショナルも、ナショナルの中に含まれている地域やコミュニティーの文化や言語もローカルなものである。

- インターナショナルという言葉とグローバルという言葉もまた全然違う。インターナショナルは、ナショナルとナショナルの間であり、その間をどうするか、という問題である。ナショナルなものの解体を考えない。グローバルはそういうことをそもそも問題にしない、という立場である。そういうことから、グローバル化と国際化はわけて考えるべきだと思う。

藤田) だいたい、国際化とグローバル化は区別して使われていると思う。

- 1 ページ目の真ん中あたりにある「『新たな脅威 (new threat) 』と言われる問題」という記述や、一番最後の部分の「人文社会自然科学の分野に応じて、教養教育の内容構成を最適化するという考え方も提案されており」という記述などは、中途半端だと思う。引用なら引用、自分の意見なら自分の意見、としないと、何となく他人の責任にしているように思う。こういうものは学術会議の報告としてどうかと思う。

藤田) 「『新たな脅威 (new threat) 』と言われる問題」の部分は別になくてもかまわないと思うので、削除する。

- 同じく表現として弱くなってしまうのは、1 ページ目の下から 8 行目の、「課題とされるのであろう」という表現ではないか。

藤田) それでは、教養の内容を要素主義的にならないように、一般にわかるように、例を 2、3 入れ込んでいくことにしたいと思う。これについては修正版ができ次第メールで送る。

- 文章表現上の問題について、「・」でつなげているが、どこで切れるのかがわかりにくい。「や」、「と」などの言葉でつなげた方がいいのではないか。

藤田) 同レベルのものを並記する場合に「・」でつなげるのは私のくせなので、直すようにする。

また、今年中にテーマ別分科会としての報告書も書かなければならないが、それについては小林先生・増淵先生と相談して、項目構成をつめて進めていきたいと思う。

残りの時間で小林(傳)の資料について審議したいと思う。

小林(傳)) 私の資料は大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会の教養養育・共通教育権等分科会報告書についてであり、今まで議論してきた日本の展望とは一応別の報告書、ということになる。しかし、議論のベースは基本的に同じである。

この所領の冒頭は「2.」であるが、私の前に「1.」という部分が入る予定で、そこはおそらく委員長に執筆してもらえと思う。その部分との整合性はまだとれていないが、「(1) 大学と教養教育の部分」は補強である。こういうものを書かないと前に進めなかったので書いたものである。この部分は最終的には削除されても結構かと思う。ポイントは、大学というのは歴史的に大学の外との間のゆるい相互作用を経験しながら、やや保守的に、しかしいつのまにか大学の外のをうまく取り込んでいる。そういう柔軟な歴史を持っている。そういう意味では、不易と有効のバランスーのようなことを大学はしてきた。したがって、昨今の産学連携というようなことも、ある意味で大学の外との相互作用の一例であり、必ずしも大学の歴史に照らしてみても諸悪の根源というわけではない。問題はあるが汲むべきものもある、という書き方をしている。そして、その上で、では教養教育を今どういう観点で考えるのか、ということで、前に吉見先生も言われたが、ある

方向をはっきりさせた方がいいのではないか、と思った。つまり、教養教育ということを議論しようとする、どうしても総花的に目配りをすればするほどぼけてしまう、ということがある。そのため、かなり独断的に方向を作っている。それは基本的に市民性の涵養、そして現代的レリバンス、という二つのポイントで論議を統一したい、という書き方がある。その中の「(2) 市民としての『実践知』の涵養」は、苅部先生のメモをほとんど入れたものである。そのあと、鈴木先生からもらったものと比較をしたところ、微妙に温度差があるように思った。苅部先生の方がより感想的とまではいわないが、トーンとしては、実践的な組み込みの部分は、言及はされているが、それほど強調されていない。鈴木先生は、逆に個人主義的な自立のようなことを強調するだけではもう保たない、他者とのコミュニケーション能力、協働していく能力、そういうものもあわせて言わなければだめなのではないか、というメッセージだと受け取った。そういう部分で、2ページが一番下の段落である。より能動的な部分を強調する形に文言を変えたのが今回の修正である。

また、3ページの(3)の上のパラグラフにある「地域活動への貢献」は苅部先生からも修正の要望があったが、「地域活動への参加」に変えたいと思う。その後に続く文章については、鈴木先生のメモを反映させている。

4ページ、「(3) 『教養教育』の概念の再確認」のところで、何をやっていくか、ということ考えたときに、2～3段落目は河合先生が言おうとしていたことを少しでも取り入れようとしたものである。あまり大学では強調されていなかったのではないかと、しかし現状ではそれをやらざるを得ない状況になっているということも含めて書いている。その上で、「3. 教養教育の在り方に関する具体的な提言」というところで、「(1) 教養教育の構成要素」としてしまったが、最初に古典教育を持ってきたのがよかったのかわからないが、塩川先生のメモを盛り込んだものである。少し書きすぎたような気もする。つまり英語教育のことをここまで書く、というのは、英語教育の専門家集団の中で受け入れられるのかどうか。書いてはみたものの、これはかなり強いメッセージになるので、委員会として出すか出さないか、皆さんのご意見を頂ければと思う。とりあえず頂いた意見を私なりにコンパクトにするとこのようになった。

「現代社会の諸問題」については、誰が書いても同じになると思う。多様な問題、現代的なレリバンスに関する問題がたくさんある。それに対して教養教育はどのようなスタンスをとるか、だが、ほとんどの大学がこういうテーマを扱ったような主題別科目やテーマ科目というものを設定してやっているといえやっている。それに対して何か我々として付け加えるものがあるか、ということについて、私にはあまり妙案が思いつかなかったのも、「それをどうぞ頑張ってやり続けてください」としか書けない。これについ

て何かご意見を頂ければと思う。

(以下、資料2後半部分を読み上げ)

一応、ここで議論してきたことをできる限り盛り込むようにした。残った時間でご意見等頂ければと思う。

- 7ページの「文系と理系の問題」の最後の方のパラグラフで、「他方…」とあるが、日本の理系教育は非常にいびつで、理系の中でも他の理系のことは一切知らないような教育をしている。なので、理系のための理系の教養科目が必要だと思う。ここでは、理系の学生に対しては市民性、といったことが書いてあるが、もう少し理系の中での理系教育が必要である。
- 文系の中でも文系の教育が必要である。

小林(傳)) 全くそういうことを知らない、ということが起こる。

- 人文科学・社会科学の分野がいかにひどいか。知識がそもそもお互いにならない。

小林(傳)) そうということが非常に大事だということを強調して始めるより手がな

い。

- 一つひとつの意見は全くごもっともと思うが、それで教養教育を設計すると、教養教育がどうになってしまうのか、という問題がある。

小林(傳)) 今回の学士課程答申は、読み方によっては、学科制度を壊せといっているような趣旨である。したがって専門をとるというのは解体して組み直しというイメージがある。しかしまだ誰もそういうことをはっきりと言っていない。それをここで言うのか、ということは非常に悩んだ。だから、「学問の体系性」といったことをわざわざ入れたのは、やはり少し気になったからである。答申を正直に読むと、学部や学科といった構造ではないシステムで行こう、と読むこともできる。学士課程を教育プログラムで編成するといっている。

- 必ずしも矛盾するわけではない、

小林(傳)) しかし普通、学部・学科に属している人にとっては、学科の学生がいて、その学生に対する個別的カリキュラム、という意識が非常に強い。

- プログラムになっても、大多数はそうではないか。

小林(傳) 結局そうなると、学科をプログラムに、看板だけ変えるというやり方になる。現実的にどういうカリキュラム編成になるのか、と聞かれても、それはわからない。この報告書は、この方向性を少しでも加味したカリキュラムに動かしていったほしい、というメッセージである。それは大学によってどのようなものになるか。おそらくかなりけんかを売っているに近い部分は語学のところだろう。それ以外は何となく取り込めるように読める。

- 英語教育をどうするか、といってしまうと、言語教育を専門とする方々には印象が悪いのではないか。要はアカデミックライティングに相当するようなスキルのことである。英語教育や外国語教育をこう変える、というとおそらく不快に思われるような形になると思う。異文化理解には英語教育が必要、ということをつけ加えて何となく取り込んでいくくらいであれば、むしろ先程のコミュニケーションのところでロジカルに伝える話の前提となるアカデミックライティングで言語教育を考える、というふうに理解されるのではないか。

- 英語はイギリス・アメリカに根ざした国語である。その上でなぜグローバル化の問題、もう一つは自然科学等でそれまでの教養教育が文学的なものではだめだということがわからない。そこのところを突き詰めていくと何になるのか、というと、英語というのは国際的な媒介語と外国語のその両面を持ったものだが、その上で、グローバル化に対応する英語、ということになればここでいっていることは間違いない。もう一つ、文化を付加された、外国語の教育というのはきわめて大事である。そのために英語については、非常に大事な外国語だ、ということがわかった上で、外国語については考えてほしい。やはり今日本でこれだけ騒がれている英語教育というのは、論理的に考えればある意味、国際語としての英語ではないか、と思う。

小林(傳) 見出しの問題と関わってくる。英語教育や外国語教育と書いたが、市民性の涵養やコミュニケーション能力の建前である。そういう視点から見ると、国際語としての英語教育というのは、独自のカテゴリーであるという言い方にする方がいいのだろうと思った。

藤田) 国際語としての英語の「教育」は「学習」とする方がいいようにも思う。

- ここの説明だが、外国語教育を通じて学ぶことの大切さが書かれている。グローバル化で英語は国際語になった。その学習の中でグローバル化である

が、一方、言語に結びついている文化的付加価値について、その前の説明で古典を学ぶことの大切さに触れていたが、国際化の中での英語の場合は文化的付加を学ぶことについて何か説明が必要か。

小林(傳)) 順番の問題もあるかもしれないが、古典教育と同じような感覚で、例えばフランス語教育・ドイツ語教育というのはありうる。少なくとも多くの高等教育経験者が国際語としての英語を学ぶときには英語の持つ文化的な側面を学ぶような、そういう視点で強調するのではなくて、コミュニケーション能力のためのもので、アメリカ英語もイギリス英語も一つの方言である、というくらいの感覚で成立している英語教育、というレベルまで下げた方がいいというのが塩川先生の意見である。古典教育とは全然違い、より実用的な、スキルに近い形で語学教育とは切り離して英語教育をやる。これによって英文学者を養成しようという話とは全然違う。

- ただ同じ言語教育をやるとしてもスピーチ重視するという前に、ただ話せるようになればいい、という議論がいつもある。

小林(傳)) したがって3) のところで書記言語が大事だとしている。

- おそらく提示する順番として、古典教育、現代社会の諸問題、英語、とした方がいいのではないか。今の順番だと古典教育の後に英語教育になってしまう。現代における諸問題を考えるときに、現代の問題は日本にとどまらず、様々な異文化との交流の中で考えなければいけない。そのときに、英語や外国語はどこに重点を置くのか、ということやっていくという順番の方がいいと思う。

小林(傳)) これはメモを順番に書いただけなので考える必要があると思う。

- 最後の教養教育と専門教育の関係について。専門教育といっても、職業の資格がらみのものもある。そして資格をどう取得するか、という専門教育によって教養教育がおろそかになっているような気がしてならない。全人格的な知識を身につける、ということどこかで入れてほしい。もう一つの分科会もあるので、そちらとのすり合わせも必要であるかと思うが。

小林(傳)) かなり市民性の涵養をキーワードにして現代的レリバンズ、となると、そもそもこういうトーンでいいのか、という問題もある。

- これから議論の方向としては、そのような方向に向いていくのではない

か。

- この分科会ではいいが、もう二つの分科会がある。他の分科会との中でどうか、ということがある。
- やはり社会人学生など、大学の学生の多様性という中でのそういう中での教養教育ということで考えなければならない。多様な学生集団というものを前提に考えないといけない。

小林(傳)) おそらくこれからの大学はどんどんそうなり、それが普通になってくるだろう。

- 古典を学ぶことの意義について。古典を教授する、人類の智を教授する、ということには、共有する、という意味があるのではないか。イメージが皆に共有される。そうすることによってあることが出てくる。

小林(傳)) それをやるとすると、日本で一番やらなければならないのは聖書を読むことではないだろうか。

- そうすると大統領の演説がピンと来るだろう。

小林(傳)) 旧約聖書のエピソードを知らないということで決定的に損していることもある。

- おそらく一番最初の会議でそういう関係の発言をしたような気がする。教養というものが、昔は聖書だったり中国の古典だったりしたものが、どちらかというとアメリカの経営学の本を読んだり、ビジネススキルの本を読んだり、ということに置き換わっていて、社会人で勉強会をやろう、というのだいたいそういうものになっている。このような現実の中で、教養というものが共有されることによってどう役に立つのか、という部分については、積極的に言えるならば言っていないといけない。グローバルスタンダードには先がない、というつもりで中国人ともアメリカ人ともイラン人とも議論できる、ということの方がいいと思う。かつてはこういうふうに生きていて、今も生きていて、ということを示す必要があると思う。
- それは教育で学べる範囲のものと、自然的リテラシーというか、我々が教育として学ぶ事ではなくて、体にしみついている、というものがある。

- ついでに、大学の持っている教育力、学習力は、表立ったところだけではない。意外に体に染み付いている部分が重要である。世界中の色々な人が集まった場では、各々の過ごした大学の話が共通の話題となり、話が盛り上がることもある。キャンパスの雰囲気のこと、名物教員のことなど、世界共通の話題である。
 - 共通化できるものの上に残余として残っているその種の文化や継承される暗黙知のようなものもある。それも一つの特徴として残していきたい。
 - 透明性やアカウンタビリティも大事だが、そういったものを相対化する書き方はできないか。相対化する、という視点を持ってないのか。
- ・ 廣田参事官より資料4について説明があった。

以上